

# 理想使命感はバーンアウトを引き起こすか？

－実験室実験による検討－

○井川純一<sup>1</sup>・五百竹亮丞<sup>2</sup>・中西大輔<sup>3</sup>

(<sup>1</sup>大分大学経済学部 <sup>2</sup>広島大学大学院・<sup>3</sup>広島修道大学健康科学部)

## 目的

仮想的なクライアントと手紙のやり取りをするロールレタリング法を用いた一連の実験室実験 (e.g., Igawa in press) では、「報われない可能性が高い状況にありながら理想使命感によって情熱を持続させることで、報酬のない状況に何度も直面し精神的消耗が蓄積していく」典型的バーンアウトのメカニズムがデモンストレートされてきた。一方、上述の実験では、セッション終了時、参加者の選択する行動が限定的だったことが課題として挙げられている。そこで本研究では、Igawa (in press) の実験パラダイムを改良し、セッション終了時の行動 (同じセッションをもう一度行う / 異なるセッションをもう一度行う / 実験を辞める) を参加者に選択させることで、理想使命感などの個人属性や報酬の有無が、参加者の意思決定に与える影響について検討した。仮説は以下の2つである。

1. 理想使命感が高い人が報酬を得られなかった場合には同一のセッションに参加するだろう。
2. 理想使命感が低い人が報酬を得られなかった場合には、実験参加を取りやめるだろう。

## 方法

**実験参加者** 大分大学の学生54名 (20.01±1.28, 男性24名, 女性30名) を対象とした。

**手続き** 実験参加者はクライアントからの手紙 (介護負担や精神疾患に関するもの) を読み、その返事を記載し、返事の内容について実験者からフィードバックを受けるという一連の行動実験に参加し、精神的消耗度の変化を測定された。

**実験指標** 精神的消耗度 (MF) の指標として VAS (Visual Analog Scale), 情熱の指標としては、主観指標、時間指標 (返事までの時間), 労力指標 (文字数) の主成分得点 (情熱得点) を使用し、報酬の有無はフィードバック (ランダム) によって操作した。個人の持つ理想使命感については、実験開始前に10項目からなる質問項目で収集して平均値で尺度得点を算出した ( $\alpha=.84$ )。なお、実験参加者は1度目の実験のあと、上述の3つの選択肢を選ぶことができた (意思決定)。

## 結果

2回目のセッションに参加した46名を対象に実験中の精神的消耗度の蓄積について検討した。2要因分散分析 (セッション内・間) の結果、有意な主効果は認められなかったが、疲労の蓄積のパターンは先行研究と類似していた (セッション内 ( $F(2,90)=2.42, \eta^2=.05, n. s.$ ), セッション間 ( $F(1,45)=1.97, \eta^2=.04, n. s.$ )。一方、情熱と報酬が精神的消耗度に及ぼす結果について重回帰分析を用いて検討したところ、先行研究と異なり、報酬の効果 ( $\beta=.01, n. s.$ )は認められなかった ( $R^2=.76$ )。

セッション1においてフィードバックされた報酬の有無が意思決定に及ぼす影響を検討するために意思決定と報酬のクロス集計を行ったところ、報酬の有無によって意思決定にばらつきは認められなかった ( $\chi^2=0.40, V=.09, n. s.$ )。また、理想使命感と意思決定の関係について検討したところ、ほとんどの参加者 (44名) が異なるセッションに参加し、同一のセッションに参加した参加者は2名、一度のセッションで参加を取りやめた参加者は8名に留まったため、統計的に有意な差は認められなかった。なお、セッションを終了するという意思決定に影響を及ぼす要因を相関分析で検討したところ、クライアントの手紙に費やした時間 ( $r=.31, p<.01$ ) で有意な相関が認められた。

## 考察

セッション間で参加者の意思決定が可能となるようにプログラムに改変し、報酬と理想使命感との関係を検討したところ、仮説とは異なり、理想使命感及び報酬は意思決定に影響を及ぼさなかった。その理由として、専門職としての適性を判断するという偽のフィードバックを用いた実験パラダイムでは、参加者が自らの能力を判定したいというニーズが高くなり理想使命感の影響が相殺されたと考えられる。今後実験パラダイムの修正やシナリオ調査などが必要である。

## 引用文献

Junichi Igawa (In Press) Can hard work trigger burnout? An empirical data of a laboratory experiment. Oita University economic review.